

成果報告書

記入日 2016 年 6 月 14 日

氏 名：藤音晃明	渡航先国名 インド共和国	所属機関 ジャワーハルラール・ネルー大学
研究テーマ：近代インドの仏教ルネサンス：再発見された仏教の受容と変容		
研究期間：2014 年 7 月～2016 年 6 月（ただし奨学金受給期間は 2015 年 6 月までの一年間）		
<p>研究成果（概要）</p> <p>留学中に報告者の論文が二本、学術誌に発表されました（『現代インド研究』第五号掲載の「近代インドにおける仏教の再発見—その背景と今日的意義」と『マハーラーシュトラ』第十二号掲載の「近代インド仏教についての一考察—ダルマーナンダ・コーサンビーの生涯と思想から」）。また、マハーラーシュトラ州ナーグプル市で現代インド仏教のフィールドワークを複数回実施しました。</p>		
<p>研究成果（詳細）</p> <p>報告者の研究は「近代インドの仏教ルネサンス：再発見された仏教の受容と変容」と題し、主に 19 世紀末から 20 世紀半ばにかけてのインド仏教に対する歴史学的調査を行うことが目的でした。しかし後述する通り、万事がこの予定通りに運んだわけではありません。計画していたものの達成できなかった点もありますし、反対に、当初の予定にはなかった資料や新しく得た人脈から、思わぬ成果を上げたこともありました。</p> <p>留学一年目には、卒業論文（東京大学教養学部）に 2014 年 1 月提出）の研究をおおむね継続し、20 世紀前半に活躍した仏教学者ダルマーナンダ・コーサンビーを中心に、近代インド仏教に新しい角度から光を当てることを目指して研究を行いました。この時期の研究は、2015 年 2 月に出版された『現代インド研究』第 5 号掲載の「近代インドにおける仏教の再発見—その背景と今日的意義」、および同年 3 月発行の『マハーラーシュトラ』第 12 号掲載の「近代インド仏教についての一考察—ダルマーナンダ・コーサンビーの生涯と思想から」という二本の論文に結実し、発表されました。これらの論文の中で報告者は、近代インドの仏教復興運動が一般に考えられてきたよりも古い歴史を持ち、そして仏教の平等主義および合理主義を強調するこの時代の議論が、今日に至るまでインドにおける仏教のあり方を一面で規定し続けていると論じました。また、仏教をめぐる当時の議論を大きな視野でとらえなおすことの重要性を指摘し、宗教としての「ヒンドゥー教」の定義が模索されていた当時において、仏教を論じることは、間接的に「ヒンドゥー教とは何か」という、当時のインドの知識人にとってより重要な問題にリンクしていたことを示唆しました。その他、留学期間中にはコーサンビーとほぼ同時代に属するラーフル・サーンクリッティヤーヤンという仏教学者のヒンディー語の著作を収集し、コーサンビーとの比較研究にも取り組みました。</p>		

コーサンビーとサーンクリッティヤーヤンを中心に近代インドの仏教徒や知識人を幅広く研究する中で、当時の人々の仏教観の特徴が見えてきた一方、それは近代インド仏教がいまだに超えられずにいる、思想史的な課題を提示しているようにも感じられました。具体的には、卒業論文および留学一年目に発表された二本の論文の中で報告者が論じた通り、近代インドでは仏教の平等主義と合理主義が強調され、それゆえにカースト制度をはじめとするヒンドゥー教の「因習」に対するアンチテーゼとして、仏教は進歩的な人々から高い注目を集めてきました。しかし逆に言えば、近代のインドにおいて仏教は常にヒンドゥー教との関係において定義されてきたのであり、仏教そのものについての豊かな思索が行われてきたとは言いきれない部分があります。また、19世紀の社会改革運動の文脈で再発見・再評価されてきたという歴史的背景ゆえに、仏教をめぐる議論の焦点はその社会的側面に集中する傾向があり、宗教的、哲学的な部分においては革新的な展開が見られたわけではありませんでした。もちろん、1956年のB. R. アンベードカルと不可触民の集団改宗以降、インド仏教は社会運動としての性格を一層強めていくので、早くも19世紀にこのような思想的傾向がみられたというのは、それ自体大変興味深いことではあります。しかし社会的側面に関心が集中し、宗教的、哲学的な側面が副次的な地位を与えられてきたという事実は、誤解を恐れずに言えば、近代インド仏教の一つの限界を示しているように感じられました。

留学中には、この分野を研究する他の研究者と交流する機会にも恵まれました。その中の一人、ギーターンジャリ・スレンドラン博士はアンベードカル以前の時代に焦点を当てた近代インド仏教の研究をしておられ、大変刺激を受けました。

報告者にとって不幸だったのは、留学中にお世話になる予定だった社会学者のミーラ・コーサンビー先生（ダルマーナンダ・コーサンビーの孫）が、お会いする前に急逝されたことです。これにより、報告者はマハーラーシュトラ州のプネーやムンバイで文献調査をするための手がかりを失い、マラーティー語資料を研究対象から外すという方向転換を余儀なくされました。

一方、大学の長期休暇を利用して実施した現代仏教のフィールドワークでは、僧侶たちと寝食を共にする中で、様々な興味深いことがらを見聞する機会に恵まれました。報告者が訪れたマハーラーシュトラ州ナーグプルは、州都ムンバイに次ぐマハーラーシュトラ州第二の大都市です。ここは1956年に不可触民の指導者B. R. アンベードカルが大衆を率いて仏教に集団改宗した地であることから、今日でも仏教徒が多く、あちこちで寺院や仏教旗を目にします。ナーグプルに住む仏教徒の大半がヒンドゥー教から改宗した元不可触民であるため、仏教寺院は彼らの集住する地区に建てられていることが多く、白を基調とした寺院は地域のシンボルになっています。寺院には3, 4名の僧侶が居住していますが、地域住民の代表者からなる委員会が寺院の管理・運営に関して彼らをサポートしています。私の滞在した寺院では朝夕に読経が行われており、僧侶が不在の場合でも、中高年の女性を中心に30人余りの信者が近隣から集まってパーリ語やマラーティー語の経文を唱えていました。その他、寺院の境内では地区の子供たちを対象とする空手の稽古が毎夕行われており、寺院が地域社会の中で重要な役割を果たしていることが分かります。寺院に住む僧侶たちは地域住民と深い関係を築いており、結婚式や赤ちゃんの命名式などの儀式に招待されて読経や説法などの宗教サービスを提供します。在家信者はその対価に現金や飲食物を提供し、僧侶を経済的に支えています。このように、僧侶と在家信者の間には互恵的な関係が存在しています。

興味深いのは、彼らと海外の仏教徒たちとのかわりです。ナーグプルの仏教を観察すると、日本や台湾、それにタイといった仏教国の信者たちが、寺院建設や自動車の寄贈、それに仏教書の出版助成など、様々な形で支援を行っていることが分かります。報告者が滞在した寺院の僧侶はタイと強いつながりを持っており、タイへの複数回の渡航経験を持つほか、寺院改築の際には本尊の仏像を、知人を通じてタイから取り寄せたと話していました。こうした外国的要素の存在は、ナーグプルの仏教を物質的な面から支える以上に、仏教をヒन्दゥー教から差異化し、仏教徒たちの宗教アイデンティティを再強化する役割を果たしていると考えられます。彼らにとって、民族や地域の壁を超えた仏教の国際性は、ヒन्दゥー教にはない仏教の強みだと考えられているからです。

歴史学の観点から近代インド仏教を観察してきた報告者がナーグプルでのフィールドワークを通じて感じたことは、宗教コミュニティとしての仏教は決して静的なものではなく、今もなおダイナミックに変化を続けているということでした。上述のとおり、アンベードカルとともに改宗したこの地の仏教徒たちは今や第二、第三世代の時代になり、コミュニティとしては一見安定期に入っているような印象を受けます。その一方で、個人の宗教アイデンティティは時として流動的であり、報告者も、数年前まで熱心な信者だった人が仏教を辞めてしまったというような事例を何度か耳にしました。だからこそナーグプルの仏教徒たちは、経文を日々読誦したり、ヒन्दゥー教徒とは違う独自の儀礼を執り行ったりすることを通じて、仏教徒としてのアイデンティティを確認し、再生産し続けているように見えました。

留学中の生活・研究でのトピックス

留学中、報告者はニューデリーのジャワーハルルール・ネルー大学（通称 JNU）に在籍し、学内の寮で二年間生活しました。JNU は初代首相ネルーを記念して 1969 年に創立された国立の大学院大学で、特に人文社会科学系の分野ではインド最高レベルの教育・研究機関として知られています。キャンパスは広大な森の中に位置し、ニールガーイと呼ばれる大型の羚羊やクジャクなどの野生動物をしばしば目にすることが出来ます。学内には雑貨店や飲食店、電器店、薬局、床屋、八百屋、さらには郵便局や銀行などあらゆる施設があり、生活に必要なものはすべてキャンパス内で揃うと言っても過言ではありません。寮の住居費や食費も極めて安いので、全般的に言って、JNU は学生にとって住みやすい環境であると言えます。

ただ、JNU が位置するニューデリーの街は、お世辞にも住み心地がいいとは言えません。インドの都市部はどこも人口過多で、交通渋滞や電気・水道などのインフラの問題に直面しているのですが、ニューデリーにとって近年最大の問題は大気汚染です。ニューデリーの空気は世界最悪の水準にあると言われており、交通量の多い場所に行くと、息をしているだけで気分が悪くなるのではないかと思うほどでした。また、夏と冬の気温差が極端に大きいデリーの気候も、この街の住み心地を悪くしていることは間違いありません。しかし「住めば都」とはよく言ったもので、私自身はそれほど強いストレスを感じることもなく、JNU での生活を楽しむことが出来ました。

留学中、私は休日や休暇中ですら勉強で忙しく、ほとんど休むことなく歩み続けてきた感があります。それだけに二年間は本当にあつという間でしたが、この間に私は多くの友人も得、研究だけではなく、生活や日々の人間関係の中で非常に多くのことを学ぶことが出来ました。私の留学を支えてくださった先生方や友人たち、そして何より、寛大なご支援をいただきました松下幸之助記念財団様に、この場を借りて心からお礼を申し上げます。

今後の社会貢献

報告者ははっきりとした研究テーマを持ち、純粹に研究上の動機から留学を決意したのですが、留学を通じて得られたものは、決して学術的な成果だけではありませんでした。したがって、今後の報告者の社会貢献のあり方も、論文を研究会で発表するといった学術的手段に限定されるべきではないと考えています。アカデミックな「研究成果」を通じて社会貢献するというより、留学を通じて成長した私という「人間」に何が出来るかを考えたいのです。

報告者はもともと浄土真宗の僧侶であり、留学中には近代インド仏教にかかわる文献調査の他、僧侶や在家仏教徒を対象とするフィールドワークも実施したのですが、その過程で日本社会における仏教、あるいは宗教そのものについて考えさせられる機会が度々ありました。人間社会における宗教の役割は何か、そして日本の仏教はその役割を十分に果たしているかと考えたとき、そこにはまだまだ取り組むべき課題が多いように感じられます。今後は研究とともに一人の宗教者としての実践的活動にも取り組み、草の根のレベルから社会に貢献する人材になればと考えています。

マハーラーシュトラ州ナーグプル市の僧侶たちと。この日は仏教徒の結婚式があり、彼らが司婚者を務めた。仏教徒の婚姻儀礼には同地域のヒンドゥー教徒の儀礼との類似点がある一方、新郎新婦の衣装などの点で差異化を図っている面もあり興味深い。



ジャワーハルルール・ネルー大学には世界各地からの留学生が 500 人ほど在籍している。写真は報告者が副会長を務めた留学生団体のイベントにて（左から）チベット人、イラン人、韓国人の友人たちと。



ネルー大学のキャンパス。ニューデリー市南郊に広がる広大な森の中に、大学の施設が点在している。中央左の建物は学生寮。地平線上に図書館が見える。